

# E. H. エリクソンの理論からみた アイデンティティと政治 (1)

——— 検討の視点とエリクソン理論の特徴 ———

麻野雅子

## 1 はじめに

「アイデンティティの政治」と政治的分断  
自由民主主義の危機や政治的対立・分断の  
激化が問題とされるなか、原因の探求が進ん  
でいる。その一つに、「アイデンティティの  
政治」の影響力拡大に言及する見解がある。  
この「アイデンティティの政治 (identity  
politics/politics of identity)」は、多様な文  
脈で用いられ、自由民主主義との関係が取り  
ざたされている。ここではひとまず、「アイ  
デンティティの政治」を、集合的アイデンティ  
ティや集团的アイデンティティとも表現され  
る、共通のアイデンティティを基盤とする諸  
集団が展開する政治と定義し考察に入りたい。

「アイデンティティの政治」の広がりに対  
して危機意識をもつ論者の一人に、フランシ  
ス・フクヤマがいる。2018年に出版された『ア  
イデンティティ』という著書で、2010年代  
になり、多くの地域で、政治の軸はアイデン  
ティティをめぐるものになった、と指摘し  
ている。共通のアイデンティティの素材は、  
国家、宗教、民族、ジェンダー、性的指向な  
ど多様であり、社会的・経済的地位や政治的  
立場などと結びついて政治的主張へと形作ら  
れる。そうした共通のアイデンティティを基  
盤とする集団の主張が力をもつようになっ

て、政治の風景も変わった。つまり、「左派  
は広く経済的平等に焦点を当てることが少な  
くなり、その代わり、黒人、移民、女性、ヒ  
スパニック、LGBTコミュニティ、難民など、  
これまでないがしろにされてきたさまざまな  
集団の利害関心を擁護するのに力を注ぐよう  
になった。一方で右派は、伝統的なナショナ  
ル・アイデンティティ (国民意識) を守る愛  
国者としてみずからを再定義しているが、こ  
のナショナル・アイデンティティは、人種、  
民族、宗教と明確に結びついていることが多  
い」<sup>(1)</sup>。フクヤマは、こうした状況が、アメ  
リカのみならず、EUと国民国家のはごまで  
揺れるヨーロッパやアジアも含め、広範な地  
域の多くの国々でみられると指摘する。いま  
やアイデンティティは現代政治のキーワード  
となり、不当な扱いを受けていると感じてい  
る人びとは、自分たちのアイデンティティの  
承認を要求するという形で政治的異議申し立  
てをしている。

グローバリゼーションの影響もあり経済格  
差が拡大しているとされるが、そうした「経  
済的な苦しみは侮辱や軽蔑の感情と結びつく  
ことではるかに強くなる」<sup>(2)</sup>。フクヤマはこ  
う述べて、ここに「アイデンティティの政治」  
の広がる要因をみてとる。フクヤマが懸念す  
るのは、アイデンティティの枠を超えて、経

済的社会的苦境にある幅広い人びとを対象とした政策が必要なのに、アイデンティティに言及しないで議論することが難しくなり、有効な政策が打ち出せなくなっている点である。

たしかに20世紀には経済政策をめぐる闘いによって二極化が生じたが、民主主義諸国では、経済のことで意見が対立していても、この対立を乗り越えて妥協点を見いだせることも多かった。他方で、アイデンティティの問題を調停するのはむずかしい。承認されるか、されないかという選択肢しかないからだ。尊厳を失ったり、周囲の目に入らない状態でいたりすることの根本には、しばしば経済の問題がある。しかし、アイデンティティをめぐる闘いのせいで、こうした問題を具体的に改善する政策に力を注げなくなっていることが多い。アメリカ、南アフリカ、インドなど、人種、民族、宗教によって階層化された国では、広く労働者階級を連携させるのはむずかしい。地位の高いアイデンティティ集団は自分たちより下の者と連携する気はなく、その逆も同じだからだ<sup>(3)</sup>。

アイデンティティに言及することで、国家内・社会内の分断がより強固なものとなり、適切な政治が行えないのではないかというのである。

また吉田徹も、「アイデンティティの政治」による分断の危険性を指摘する。吉田は、「アイデンティティに基づく社会的承認を求めるとき、そのアイデンティティが承認されるに値することを証明するため、それはあえて美化

されたり称賛されたりする」点を問題視する。つまり「他のアイデンティティとの差異や優位（あるいは劣位）を強調することで、それが他のアイデンティティと衝突することもあれば、個人がそのアイデンティティに囚われてしまう可能性も出てくる」<sup>(4)</sup>。このように、他を否定することで自らを肯定するアイデンティティを「捕食性アイデンティティ」と呼んで、その排他性・攻撃性を警戒する。「アイデンティティの政治」によって、他者否定の傾向が広まると、幅広い人びとを結びつける政治、理性的な対話に基づく政治は困難になる。自由民主主義の政治にとって必要なのは、「異なる者との間の共存」を可能にする対話の契機であるが<sup>(5)</sup>、「アイデンティティの政治」はその前提を破壊しかねないものとなる。とりわけ、アイデンティティを固定的に考え、そのアイデンティティからのみ自分たちの社会的位置づけを捉えるなら、自由で平等な諸個人の権利を中心に成立してきた自由民主主義は果てしない分断に悩まされることになる。さらに、「アイデンティティの政治」が分断を促進したその先に、特定のアイデンティティに依拠した強権的なリーダーが登場し、自由民主主義の理念である理性的な対話を阻害し、さらには法の支配や立憲主義を破壊することにもなりかねない。

#### 「アイデンティティの政治」と自由主義

一方、「アイデンティティの政治」に関して詳細な分析を行っているマイケル・ケニーは、「アイデンティティの政治」を、自由主義への敵愾心から、自由主義的な価値を否定し、民主的な交流や平等という規範を破壊する政治とみなす見解に異議を唱えている<sup>(6)</sup>。

確かに「アイデンティティの政治」は、自由主義的な価値を実現しようとするものでもある。というのも、共通のアイデンティティを基盤とする集団が主張を展開する背景に、自分たちが、その共通のアイデンティティゆえに、平等な尊厳の保障や社会的承認がなされず、差別を受けていると感じていることがあるからである。例えば、人種的、民族的、性的といった点から、社会的偏見を被り、自分たちの可能性、自由な生の探求が妨げられるとき、怒りや悲しみなどの気持ちが生まれ、そうした社会を変えたいという欲求をもつようになる。一人で社会を変えることは難しくても、共通のアイデンティティと共通の感情をもつ人たちとともになら、社会を変える行動へと踏み出すことができ、実際に社会を変えることもできるかもしれない。この不利な扱いを受けている集団が展開する政治が、不平等の解消を目的とし、すべての人の平等な尊厳の上に成り立つ社会を形成しようとする営みであるなら、それは、自由民主主義の理念と一致する。つまり、アイデンティティの名においてなされる社会的闘争や政治的異議申し立ての中核には、自由主義的価値、具体的には平等の実現、自尊心の保障、政治参加への意欲などの価値が存在しているのである。

しかしケニーも指摘しているように、自由主義者からすれば、「アイデンティティの政治」でなされる異議申し立て、挑戦や闘争のなかには受け入れがたいものもある。それはすでに指摘したように、「アイデンティティの政治」が、他者否定を伴う分断の政治となりがちで、自由主義の掲げる寛容や合理的対話という理念を否定する危険をはらむものだからである。ケニーが主張するのは、「自由

主義とアイデンティティの政治の関係が単純な二項対立ではないこと」、「自由主義とアイデンティティの政治を实践する集団とが、絡み合い相互に依存しうるといふ面」が存在していることを理解することの重要性である<sup>(7)</sup>。このように「アイデンティティの政治」は自由主義的理念を共有しその実現を目指す営みであるものの、自由主義的理念の否定に行きつく危険を伴うものである。

さらに「アイデンティティの政治」が影響力を増大させると、人びとは、政治において、「何」をするかよりも「誰」がするかに関心を示すようになる。これは、「アイデンティティの政治」が台頭した背景と関係が深いと、吉田徹は述べている。つまり、1968年の革命およびそれ以降の「新しい社会運動」の影響である。

それまでの政治とはといえば、社会や国家の営みがイメージされるのが当たり前だった。それが68年革命を経て、政治は個人に関わるものとしてもイメージされるようになった。「正しいかどうか」ではなく「当事者であるかどうか」こそが、政治的な動員の原動力となっていく。「何をすべき」かの問題ではなく、「誰がするのか」という争点が台頭したといってもよい。加えて、イデオロギーのような全員に関わるものは、集団主義や画一的思考を意味するものとして棄却されるようになった<sup>(8)</sup>。

この68年革命が掲げた「個人的なことは政治的なこと」というスローガンは、「政治的なことは個人的なこと」へとすり替わって

いき、「誰」のための政治か、「誰」がやる政治かに関心が集まり、その「誰」がどういうアイデンティティをもつのが、政治闘争の焦点となっていく。実際「誰」がやるかが問題になるとき、妥協や調整は難しい。さらに共通のアイデンティティが、民族や人種、文化的属性、性別や性的嗜好という点で固定的で排他的なものであるなら、「誰」に含まれる人は限定され、普遍的な個人像を基にする自由主義の立場とは相容れにくくなる。つまり、「アイデンティティの政治」は、基盤となるアイデンティティが固定的・限定的であるとき、それを共有しない人たちもまた明確になり、共有しない人たちに対する排除や敵対を生み出し、自由主義の寛容の理念を忌避することへとつながりかねないのである。

#### アイデンティティの不確かさ

このように、影響力を増大させ世界的な広がりをもつ「アイデンティティの政治」は、基盤となる共通のアイデンティティが狭く限定的なもの、固定的なものとなるとき、危険性が高まる。その意味で、この政治が前提とする、共通のアイデンティティがどのようなものであるか、どのように人びとに受け取られるかが重要となる。

しかし、共通のアイデンティティとは何か、あるいは、そもそもアイデンティティとは何かということについて明確な答えがあるわけではない。とりわけ、現在では、技術発展やグローバル化の進展により、人びとの生活環境や社会関係の変化は激しく、価値観は多様化し、雇用も流動的になり、家族をはじめ親密な人間関係も安定的ではなくなっている。そうしたなかで、個人レベルにおい

ても、アイデンティティと呼ぶものもちうるのかどうか怪しくなっている。また、その時点では何らかの共通のアイデンティティをもつと思えた集団でも、実際にはその集団を構成している人たちの価値観や置かれている立場は多様であると同時に不安定である以上、アイデンティティも一時的に共通された流動的なものでしかないのかもしれない。そもそもアイデンティティとは、個人や集団が、他者に対して、「自分（たち）は〇〇である」と示す自己定義、自分（たち）の同一性を意味しており、一貫性や不変性、恒常性といった属性と結びつく概念であった。しかし今日アイデンティティ概念は、流動性、不安定性、多元性という言葉とともに語られることが多くなった。社会集団や共同体に複数所属することが当たり前の今日、その人の人生を包括的に捉える固定的なアイデンティティがあると想定するのは現実的ではないのかもしれない。

もし今日人びとが複数のアイデンティティをもつ多元的な自己という意識を有するのであれば、「アイデンティティの政治」で提起される共通のアイデンティティもまた、人びとをそれほど固定的に拘束するものではなく、他のアイデンティティに対する嫌悪や否定へとつながらない可能性もある。そうなれば自由民主主義との両立が可能になるのかもしれない。

他方で、アイデンティティの流動性が極めて大きく、集合行動や連帯の基礎とはなりえないのに、確固とした共通のアイデンティティをもちたいという気持ちが高まると、かえって、人為的に、そのアイデンティティを固定的で拘束的なものとしようとして、他のア

アイデンティティとの境界線を明確にすることも起こりうる。「アイデンティティの政治」を展開する集団が、自分たちの共通のアイデンティティを確固たるもの、揺るぎないものにしようとするとき、それは吉田のいう「捕食性アイデンティティ」となって、他者との理性的な対話を拒絶する態度と結びつきかねない。とすると、アイデンティティの流動性や不安定性はむしろ、「アイデンティティの政治」の閉鎖性、および敵対性・攻撃性を高め、自由民主主義を脅かす危険性を増大させるのかもしれない。

#### 本論のテーマ

以上のように、現在は、アイデンティティが何かについての共通理解が不明確で怪しいものになっているにもかかわらず、「アイデンティティの政治」は勢いを増している。それゆえ、「アイデンティティの政治」とは何か、「アイデンティティの政治」と自由民主主義との関係はいかなるものかを考えようとするなら、そもそもアイデンティティという概念で捉えられるものは何か、どのようなアイデンティティ概念を前提に「アイデンティティの政治」が語られているのか、といった考察から始めなければならない。

こうした問題意識から、筆者は、「アイデンティティの政治」に関する様々な議論において、どのようなアイデンティティ概念が前提とされているのか、またどのようなアイデンティティ概念を前提とすれば「アイデンティティの政治」は自由主義の否定につながるのかを検討していきたい。

その検討の出発点として、本論では、E.H. エリクソン (1902-1994) の理論の分析に着手

したい。エリクソンは、精神分析や発達心理学の研究者であるが、「アイデンティティという言葉が日常語まで普及させた当の本人」<sup>(9)</sup>と評されるように、アイデンティティ概念の礎を作り上げた人物である。エリクソンのアイデンティティ概念は、精神分析や発達心理学の領域において精緻化されていったものであり、基本的には個人の心理に注目したものであるが、他方、最初の著作が『幼児期と社会』と題されているように、その考察は、常に社会との関係で展開されている。エリクソンも「アイデンティティについて考察する際、個人の成長とコミュニティの変化とを切り離すことはできない」と述べて、心理的なものと社会的なもの、発達のものと歴史的なものとの相互作用のなかで、アイデンティティ形成を捉えていく必要性を指摘している<sup>(10)</sup>。また、エリクソンのアイデンティティ概念が受け入れられた時代背景には、1960年代以降のアメリカで、集団的抗議運動、今でいう「アイデンティティの政治」が広がりつつあったこともあり、「アイデンティティの政治」論とも関係が深い。エリクソン自身、アイデンティティ概念が、「アメリカの黒人革命に関する文献のなかに広くゆきわたっている」<sup>(11)</sup>ことは認識しており、植民地主義からの解放といった視点から、アメリカの黒人革命やインドのガンディーのリーダーシップについて検討している。その意味でも、「アイデンティティの政治」が前提とするアイデンティティ概念の研究を、エリクソンの理論研究から出発することは意義がある。またエリクソンが、アイデンティティの排他性を問題視し、その克服を可能とする倫理を探求した点からしても考察する価値がある。た

だ、エリクソンの生きた時代と現代では、個人が向き合っている社会も異なっており、エリクソンのアイデンティティ概念の古さも指摘されているところであり、その点は慎重な検討が必要である。

以下、エリクソンの理論・思想におけるアイデンティティ概念と、その政治観や倫理観について、検討していく。まずは、その検討の視点を明らかにするために、現在展開されている「アイデンティティの政治」論のいくつかを取り上げて、そこでのアイデンティティ概念がどのように提示されているかを概観したい。アイデンティティ概念の多義性を明らかにすることは、エリクソンの複雑で捉えがたいアイデンティティ概念の理解にとって必要な作業だからである。

## 2 「アイデンティティの政治」論におけるアイデンティティ概念の多義性

すでに「アイデンティティの政治」を共通のアイデンティティを基盤とする諸集団が展開する政治と定義したが、以下、この「アイデンティティの政治」がどういう動きで生じているかについて、3つの見方に分けて検討していく。1つ目は、「アイデンティティの政治」は、政治家やメディア関係者の上からの操作によって活性化しているという見方であり、2つ目は、十分な承認を得られない疎外感を抱く人たちの下からの抗議から発しているという見方である。また、「上から」と「下から」の相互作用によって生まれるという見方、つまり、下から起こる抗議運動を政治的リーダーが上から操作しているといった見方も存在する。これらの見方において、「アイ

デンティティの政治」がどのように捉えられているか、そこで展開されているアイデンティティ概念がどのようなものと考えられているかを、明らかにしていく。

### 「アイデンティティの政治」の見方1—上からの操作

まず「アイデンティティの政治」が上からの操作によって作り出されているという見方として、渡瀬裕哉の議論を紹介する。選挙実務の経験が豊富な渡瀬は、アメリカにおける「アイデンティティの政治」隆盛の背景に、自らの陣営と支持者が共有できるアイデンティティの創出が選挙戦略にとって必須である点を挙げる。アイデンティティに訴えることが票に直結する最も確実な方法であるため、最新の選挙マーケティング技術は、「アイデンティティの分断」の発見に努め、それを基に、どのようにアイデンティティを利用すれば選挙で勝利できるかを教える。この「アイデンティティの分断」は、所得、人種、学歴、性別など、客観的に確認可能なデータ、つまり「属性ラベリング」を基に人間を区分することによって、複数のグループに切り分けることで作り出される。最初に「社会科学の要素を踏まえて人間集団を複数のグループに隔てる断層を発見する」<sup>(12)</sup> 役割を担うのは、社会科学系の教授たちをはじめとする知識人である。例えば、トランプ支持者とされた「白人、低所得、低学歴、肉体労働の男性」も、一つのアイデンティティである<sup>(13)</sup>。センセーショナルなニュースを欲するメディア関係者や選挙に勝利したい政党や候補者は、切り出されたアイデンティティによる分断の構図を利用して、そのアイデンティティをも

つとされる人たちのニーズを特定し、それに応じたメッセージを発していく。働きかけられた人たちは、分断された一つのアイデンティティを引き受けるように誘導され、政治的に動員されていく<sup>(14)</sup>。このように、知識人・メディア関係者・政治家の3者が属性ラベリングに基づくアイデンティティの対立を選挙争点へと仕上げていき、有権者は、好みに応じた情報を届けるSNSを通じてそのメッセージを受け取り、分断の構図に巻き込まれていく。

現代の人びとは、知識人によってズタズタにアイデンティティを分断され、メディアによって、その分断内容を周知徹底された世界に生きる。さらに情報技術の発達により、個人レベルにまでカスタマイズされたタイムリーな政治情報がお届けされる状態だ。人間の思考は自らが取得した情報から構築され、認知の積み重ねによってなされる。その認知を形成する情報が意図的に偏ったものである限り、筆者は「アイデンティティの分断」は必然的に拡大化・深刻化し続けていくと確信している。民主主義社会が成熟し、経済的な豊かさが実現され、社会や人びとの在り方について思考する知識産業が増加すればするほど、アイデンティティの分断は、一層拍車がかかっていくだろう<sup>(15)</sup>。

渡瀬は、自分にとって重要なアイデンティティを自ら発見し、選択していくことは、人生に豊かさをもたらすために望ましいことだという。しかし現代社会では、本来多様なア

イデンティティをもつ人びとが、知識人が発見し、メディアが拡散し、政治家が利用する、画一的で単純化されたアイデンティティを選択するよう操作されてしまっている。こうした事態を回避するのに重要なのが、自由意思によってアイデンティティを選択するという行為である。今必要なのは、「自らが持つアイデンティティの多面性について、従来よりも意識的になり、それらを精査した上で取捨選択や優先順位付けをしていくこと」<sup>(16)</sup>である。「上」から作り出された断片的なアイデンティティに自分が飲み込まれないようにすべきであり、何か一つのアイデンティティを妄信せず、あくまでもアイデンティティとは自らが使い分ける「道具」でしかないことを認識すべきである。健全な民主主義を維持していくためには、有権者のアイデンティティの主体的な再構築作業が不可欠であり、それは、自分のアイデンティティの構成要素として取り入れるべきか否かを「自由意思」で決めていくことを意味する。そうした「自由意思の活用」こそが、「他者の複雑なアイデンティティとの間で共通点・相違点を見出すコミュニケーションを可能とし、民主主義の機能不全を是正することにも役立つ」<sup>(17)</sup>。このように渡瀬は主張する。

確かに、渡瀬が指摘するように、選挙戦略として分断されたアイデンティティが作り出されているという側面は否定できず、他者によるアイデンティティの操作に警戒的であるべきだというのももっともである。とはいえ、客観的データによる「属性ラベリング」を基に、属性に該当する人たちの置かれている状況に対して、政治家が対策の必要性を訴えることは当然のことであるし、必要なことでも

ある。また、政治家は自らの理念に基づいて特定の政策を実現しようとするのであり、そのためには、それを阻む敵と実現に賛同してくれる味方の峻別もまた不可欠な戦略である。それを「アイデンティティの分断」と表現してしまうと、アイデンティティという言葉の特殊性は失われてしまうのではないだろうか。例えば、所得という客観的基準による富裕層と貧困層との区別、居住地による都市在住者と地方在住者との区別などの属性ラベリングとアイデンティティとの違いに敏感であるべきではないだろうか。

また、渡瀬の議論で前提とされているアイデンティティ概念は、知識人・メディア・政治家により作ることのできる作為的で操作的なものとされている。そのため、そのアイデンティティが当てはまるとされた人びとも、自由意思で、そのアイデンティティを受け入れるかどうかを決められる。しかし、アイデンティティとは、本人の意思で自由に選択し使い分けられるようなものなのだろうか。アイデンティティという概念には、自由意思で軽々と変更できない、心理的・文化的「重み」がまとわりついているように思われる。次に、アイデンティティの操作可能性、選択性に関する別の見方を紹介する。

#### 「アイデンティティの政治」の見方2—下からの抗議

アイデンティティとは、社会的構成物であり、他者の承認や意味づけによって成り立つものであるため、本人が簡単に操作できない「重み」をもつものだという考え方の例として、社会学者の石川准の議論を取り上げる。石川は、『アイデンティティ・ゲーム』とい

う著書の中で、以下のように述べている。

人は自らのアイデンティティを管理する能動的な選択主体である。だがそれは、社会的な評価や処遇とは一切無関係に、独力でアイデンティティを支えることができるという意味においてはではない。アイデンティティは自給できない財である。それは、他者と自分との相互作用のさなかに生成する。だから、人は自らのアイデンティティを管理するために、他者に働きかけて、彼の自分に対する評価や処遇を操作しようとする<sup>(18)</sup>。

石川が、アイデンティティ管理と呼ぶのは、望ましいアイデンティティを獲得し、望ましくないアイデンティティを返上しようと、様々な方法を駆使する営みのことである。人は、「自分がいかに価値のある人間であるか」を証明せずにはいられず、そうした存在証明に人生の大半を消費しているという<sup>(19)</sup>。この石川の議論では、アイデンティティは、個人が自分の望むようにしようと試みるものであると同時に、他者の視線で否応なく決めつけられるものでもある。多様なアイデンティティの中から自らの自由意思で簡単に選択できるというわけではない。アイデンティティには、他者の評価という裏付けが必要なのである。とりわけ、アイデンティティは、周りから押し付けられた否定的な評価と結びついているとき厄介なものとなり、それは「スティグマ」と表現される。

石川は、否定的な社会的評価を伴うアイデンティティである「スティグマ」を貼られた逸脱者、社会から非難されたり蔑視されたり



差別されたりしている人びとのアイデンティティ管理を分析し、思うように操作することの難しさを描き出している。ここで着目されているのは、ゴッフマンの逸脱論に依拠した、逸脱者が行うアイデンティティ管理（印象操作）の3つの戦略である。石川は、戦略ごとに、アイデンティティを操作しようとしても結局は成功しないことを説明している。3つの戦略について以下概略する。

1つ目は「成りすまし」である。これは、自己に関する一定の情報が露見すれば「スティグマ」を貼られることになる「潜在的逸脱者」が、「スティグマ」につながる自己の情報を隠蔽する戦略である。これを採用する場合、隠蔽に成功している間は自分のアイデンティティをコントロールできるわけだが、絶えず露呈する不安にさらされており、心理的安定を築くことはできない。その意味で成功とはいえない。2つ目は「カモフラージュ」である。これは、「スティグマ」を貼られた「顕在的逸脱者」がその要因となった特性を目立たなくするために、威信の高い職業や学歴、財産や名誉などのステイタス・シンボルを獲得する戦略である。しかしステイタス・シンボルを得ても、「スティグマ」は周りの人びとの注意の焦点に居座り続け、解決とはならない。3つ目が「役割距離」である。これは、与えられた否定的役割を表面上は受け入れながらも、完全には飲み込まれているわけではないことを示すために、あえて期待に背いたり規範を無視したりして、役割と真の自己との関係の切断を図る戦略である。期待に背く行為や規範の無視は、それ自体自らがすすんで求めたとはいえず、自分らしく振る舞うことができない虚しさや苛立ちは残ったままで

ある<sup>(20)</sup>。

このように、いずれの戦略をとるにしても、また「いかに巧みに印象操作を駆使しても、様々な日常的状況で直面するレイベリングやサンクションを、完全にかいくぐることはできない<sup>(21)</sup>。望ましいアイデンティティを獲得するという点で、個人によるアイデンティティ管理や印象操作は不十分な戦略でしかないことがわかる。

そこで、「スティグマからの解放を企図して、社会の支配的な逸脱の定義に挑戦する」という選択肢が浮上する。その意味で、集合的抗議はアイデンティティ管理の戦略でもある<sup>(22)</sup>。「スティグマ」を貼られた人びとが集合的抗議に関心をもち参加を決めるまでには、自らに強いられたアイデンティティに向き合い、自分自身もまた抱えているかもしれない、社会から与えられた否定的評価を問い直す必要がある。そのとき、自分に否定的評価を与えてくる「スティグマ」のほうの間違っているのではないかという意識を覚醒させる場と機会が必要で、その意識を共有する人たちとの出会いが重要になってくる。

ただ、そうした問い直しや意識の覚醒は、「制度化された逸脱の定義の維持・強化に努める党派の利害と真っ向から対立する<sup>(23)</sup>。「スティグマ」を貼られた人びとは、逸脱の定義に抗議することで、現状を維持したい人びとに脅威を与えるのである。具体的には、生命や財産に対する脅威かもしれないし、性愛観や信仰に対する脅威であるかもしれない。つまり、この集合的抗議は、抗議する側の人びとと、「スティグマ」を貼りつけようとする側の人びととの、アイデンティティをめぐる戦いとなるのである。こうした戦いは、

通常「スティグマ」を貼りつける側を迫害者や差別者として印象づけることになるが、他方、迫害者や差別者とみなされた人びとは、自分たちの党派的な経済的・政治的利害がむき出しになることへの恐れもあって、「スティグマ」を貼る根拠を、社会の最も基本的な価値に結びつけ、徹底的な抵抗をすることもあつた。こうした対決が抜き差しならないものとなつたとき、最後の手段として、敵対する党派を破壊する暴力の行使に至ることもある。石川はこの点「逸脱の政治は、少なからず殺人やテロリズムにまでエスカレートする」<sup>(24)</sup>と指摘する。

石川によれば、アイデンティティは、自給財ではなく社会的基盤に根づいたものであり、それゆえに、個人のアイデンティティ操作は完全には成功しえない。特に、望まぬ「スティグマ」を貼られた人びとが自らのアイデンティティを問い直すとき、その行為は、集合行為へとつながり、逸脱の政治の展開へとつながっていく。これが、自発的な、つまり下からの「アイデンティティの政治」を生み出していく過程である。石川は、「スティグマ」からの脱却を目指す人びとが、集合行為としての逸脱の政治、「アイデンティティの政治」を展開するためには、ナルシズムという内向きのベクトルに抗して、人間解放へ向かう外向きのベクトルを創出していくこと、それを可能にする社会的ネットワークを構築していくことの重要性を指摘している<sup>(25)</sup>。

### 「アイデンティティの政治」の見方3—憤りの政治

この石川が描く「逸脱の政治」、本論でいう下からの「アイデンティティの政治」は、

フランシス・フクヤマのいう「憤りの政治」と共通する部分が多い。フクヤマは、自分たちの集団の尊厳がしかるべく認められるべきだと要求に基づく運動、自分たちの尊厳が傷つけられているという「屈辱に対する憤り」の政治が世界中で広がっているという。この「憤りの政治」は、自分たちの集団的アイデンティティが十分に承認されていないという思いから生じたものとして、「アイデンティティの政治」の現れに他ならない<sup>(26)</sup>。

フクヤマは、近代のアイデンティティ概念が3つの要素から成り立つものだと述べる。3つの要素とは、人間を突き動かす根源的な承認欲求 (thymos)<sup>(27)</sup>、内なる自己と外面の自己とを区別し内なる自己に道徳的価値を見出す考え方、承認は全員に与えられるべきだとする尊厳 (dignity) の観念である<sup>(28)</sup>。この近代のアイデンティティ概念が「アイデンティティの政治」を生み出す根源であるが、アイデンティティが政治化する理由は大きく2つある。1つ目は、外面との自己と区別された内なる自己が、その価値や尊厳を十分に認めようとしなない社会的ルールを強いる外的世界とのギャップを常に意識しており、そのギャップをなくし、自らの価値が公に承認されることを求め、立ち上がるからである。内なる自己は、自分の価値が正当に認められていないと感じるとき、自らを社会のルールに合わせるのではなく、社会のほうが変わる必要があると考えるのである。2つ目は、国家が、平等な承認を約束し、個人の権利として具現化しても、実際には社会の中で平等な承認や尊敬を得ることが難しいからである。「とりわけ社会の周辺に追いやられてきた歴史を持つ集団の人びとは、尊敬を得るのがむずか

しい<sup>(29)</sup>。この平等な承認を求めて立ち上がる「アイデンティティの政治」がいまや「民主革命から新しい社会運動まで、ナショナリズムやイスラム主義から現在のアメリカの大学キャンパスでの学生運動まで、現代世界の政治闘争の大部分を包含している」。こうした状況は、「承認をめぐる闘争」こそが人類史の究極の推進力だとするヘーゲル哲学の正しさを証明しているとも捉えられる<sup>(30)</sup>。

フクヤマは、人間の承認欲求から「アイデンティティの政治」の必然性を説明しているが、この承認欲求 (thymos = テューモス) は2種類あるという。つまり、ほかと平等な存在として尊敬されたいという「アイソサミア (isothymia = 対等願望)」と、ほかより優れた存在と認められたいという「メガロサミア (megalothymia = 優越願望)」である。「アイデンティティの政治」が展開される際には、この2つの願望が交差する。まず、自らおよび自分たちの集団の尊厳がないがしろにされていると怒る人びとが「アイソサミア」が満たされないことに対する不満を募らせる。そこへ、政治指導者が「メガロサミア」に突き動かされて、不満を抱く人びとにメッセージを発して政治的に動員し、自らが偉大な指導者であること証明しようとする。この「メガロサミア」は、リンカーン、チャーチル、ネルソン・マンデラのような英雄を生む原動力となるが、他方国を独裁と不幸へ導く圧政者を生む根源でもある。昨今の例では、アメリカの元大統領であるドナルド・トランプ、ロシア大統領のウラジーミル・プーチンやハンガリー首相のオルバーン・ヴィクトル、アルカイダ創始者のオサマ・ビンラディンらが、「自分たちに勢いをつけるために、国や宗教

や生き方が尊重されていないと感じていた一般人の憤りを利用」しつつ、「憤りの政治」を展開している<sup>(31)</sup>。

本論の文脈でいえば、フクヤマのいう「憤りの政治」は、「アイソサミア」を原動力とする人びとの下からの抗議を、「メガロサミア」を原動力とする指導者が上から操作することで生まれる政治ということになる。この「憤りの政治」は、「アイソサミア」に基づくものであるため、平等の実現という自由主義的な理念の実現を目指すものである。ただ、「メガロサミア」とも結びついているため、平等な尊厳の承認を超えて、自分たちの優位性を示す運動へと展開することにもなりがちで、他者の排除や他者への攻撃、寛容や理性的対話という自由主義的理念的破壊へとつながる危険性をはらむものでもある。

以上、「アイデンティティの政治」を大きく3つの捉え方に分けて、そこで前提とされているアイデンティティ概念について論じてきた。具体的には、「アイデンティティの政治」と選挙戦略を結びつける見方からすると、アイデンティティは、知識人やメディア関係者や政治家が時々創り出すもので、人びとは、それを受容しやすい環境にあるものの、自由意思で選択できるものであるし、そうすべきものだけということになる。「アイデンティティの政治」を「スティグマ」から脱却しようとする人びとが不本意な逸脱の定義に抗議する政治とすると、アイデンティティは、一部は自らが管理できる操作可能なものであるものの、不本意な評価を押し付けられる人たちにとっては、その逸脱の定義を破壊しないかぎり、望むものにはなりえない社会的構成物と

いうことになる。「アイデンティティの政治」は「憤りの政治」であり自由主義的理念との共存が危ぶまれる政治と理解する立場からすると、アイデンティティは、内なる自己の価値を承認されたい欲求から構成されるものとなる。ただし、その承認欲求には2種類あり、ほかと同じ承認を求めるか、特別に優れた存在であることの証明を求めるか、そのどちらの比重が大きいかで、「アイデンティティの政治」は姿を変える。

3つの例を挙げながら、現在「アイデンティティの政治」論のなかで展開されているアイデンティティ概念の多様性をみてきた。そのなかで、アイデンティティとは、個人が自らの意思で作り上げ選択していくという側面と社会の変革がなしとげられないと望むものにはなりえないという側面があることが確認できた。また、社会的承認とも不可分であるため、アイデンティティをめぐる葛藤は政治化することが確認できた。その際、アイデンティティの承認欲求がどのようなものかが「アイデンティティの政治」の性格を決めるという点で重要である。こうしたアイデンティティおよび「アイデンティティ政治」の二面性、多義性を踏まえて、エリクソンの理論の検討に取り組んでいく<sup>(32)</sup>。

### 3 エリクソンの人生と思想体系

エリクソンのアイデンティティ概念およびアイデンティティと政治の関係性に関する理論の紹介と検討に入る前に、アイデンティティ概念理解に重要と思われる、エリクソンの人生（ライフヒストリー）とその思想体系の特徴について説明する。エリクソンが魅力

的なアイデンティティ概念を創作できた背景には、その人生（ライフヒストリー）・生きざまがあるとされる。まずは、詳細な伝記であるL. J. フリードマンの『エリクソンの人生—アイデンティティの探求者』に依拠して、エリクソンの人生の歩みについて言及し、そのあとエリクソンの思想体系と手法の特徴について述べていく。

#### エリクソンになるまでの人生—アイデンティティの探求の実例として

エリク・ホンブルガー・エリクソン（Erik Homburger Erikson）は、1902年コペンハーゲンのユダヤ人社会の名家に生まれた。母親は既婚であったが夫は結婚直後から行方不明で、エリクは嫡出子ではあるものの、実の父親が誰かは生涯わからなかった。母親は、エリクが3歳のとき、カールスルーエの小児科医テオドル・ホンブルガーと再婚した。母親は、テオドルとの同意のもと、テオドルが実の父親だとエリクに教えたが、エリクは、ひそかに交わされていた「エリクの実の父親は非ユダヤ系の芸術家だ」という話を盗み聞きしたこともあって、信じてはいなかった<sup>(33)</sup>。その後母親は、エリクが8歳ごろ、テオドルが義父であることは認めたものの、行方不明だった元夫が実の父親だという嘘を教えて、エリクは一時期それを信じていた。エリクが青年期を迎えると、父親が誰かについての疑念が高まり、「父親は芸術の才能豊かなデンマークの貴族でキリスト教徒らしい」という自分なりの結論を出し、その後は「養子であることからアイデンティティを作る」こととなる。母親は、生涯実の父親が誰かを伝えず、それを知りたかったエリクとの

関係はぎくしゃくしたものとなっていった<sup>(34)</sup>。エリクの子ども時代は「養子アイデンティティ」のもとでの「綱渡りの生活」であったといえる。

18歳でギムナジウムを卒業後、数か月のシュヴァルツヴァルトの徒歩旅行ののち、19歳でカールスルーエにあるバーデン州立芸術学校に入学、義父の望んだ医者になる道と決別した。芸術の道を志すエリクは、1922年20歳でミュンヘンへと旅立ち、そこの芸術アカデミーで2年間芸術技法を学んだ。この時期を、のちに「長い遍歴時代（ヴァンデルシャフト）」と位置づけている<sup>(35)</sup>。

ギムナジウム時代からの友人で、のちアメリカで精神分析家となるベーター・プロスの紹介で、1927年25歳のとき、ウィーンにある、アンナ・フロイトらが作る学校の教員となった。のちにエリクは、ウィーン到着を「私のキャリアの真の始まり」と評した。ここから「アイデンティティの創作者エリク・エリクソンになるための道を歩き始めた」<sup>(36)</sup>といえる。精神分析と本格的に向き合うべく、27歳のとき、アンナ・フロイトから教育分析を受けることに決めた<sup>(37)</sup>。また伴侶となるジョアン・サーソンと出会い、28歳で、長男のカイが生まれて結婚、ジョアンは生涯エリクを公私にわたり支えることとなる。31歳のエリクは、ウィーン精神分析教会の正会員に選ばれ、国際精神分析協会の会員資格を得て、世界中で開業できるようになった。その年(1933年)にはジョアンの意向もあり、ウィーンを離れ、コペンハーゲンに向かったが、デンマークでは市民権を取り戻すことができず、アメリカへの移住を決意、秋にはアメリカに到着した。

「アメリカ移住者」となったエリク・ホンブルガーは、ボストンで児童分析家としてキャリアをスタートさせ、ハーバードで、続いてイエールで、研究員としての職を得、1939年37歳のときに、エリク・ホンブルガー・エリクソンと改姓してアメリカ市民となった。この、祖国を離れ、移住し、アメリカ人になるという経験、とりわけエリクの息子という意味のEriksonを名乗ることで自分自身を作り上げたという選択は、アイデンティティ概念構築にとって極めて重要だったと指摘されている。ただ、エリクソンの移住はアメリカがはじめてではない。カールスルーエから家族と離れてウィーンへ、そのウィーンでは6年間に9回も住まいを替え、コペンハーゲンに戻るも、その地で市民権を得られず、アメリカに渡ったが、アメリカでも、頻繁に引っ越しを繰り返し、何度も大陸を横断した。この点に関して、フリードマンはこう指摘する。

この頻繁な根こぎ（アップルーティング）には、エリクの父を知らないという苦悩がつきまとっていた。それはエリクに自分が不完全であると感じさせ、コミュニティや国籍という感覚をもたせず、足のおもむくままに移動できる自由さと、つねに動き続けずにはいられない不安定さを与えた。……後にエリクは「私を家族、国、宗教、職業の上で周縁的存在にしたのは、私の人生史（ライフヒストリー）なのです」と述べた。明確な自分の境界をもたない周縁的存在という、苦しく、ときに悲しい感覚が……彼にアイデンティティとアイデンティティの危

機という概念について考えさせる一つの要素となった<sup>(38)</sup>。

エリクソンのアイデンティティ概念を考えていくうえで、幼児期から青年期にかけての経験、アメリカへの移住と改姓という選択は、極めて重要である。コペンハーゲンに安住の地を見出せなかったエリクソンは、不安におびえる移住者を歓迎してくれたアメリカに希望を見出し、アメリカに恩義を感じ、忠誠を誓っていた。そのアメリカで、1949年47歳のときカリフォルニア大学バークレー校で教授職を得るものの、マッカーシズムのあらしが吹き荒れる最中、忠誠誓約書問題が起こり、それへの署名を拒否して職を辞することになる。この決断をするまでに、エリクソンはアメリカに忠誠を誓うことの意味をめぐり悩みぬいた<sup>(39)</sup>。この経験は、アイデンティティと忠誠という問題への深い考察をもたらした。

中年期を迎えたエリクソンは、マサチューセッツ州オースティン・リッグス・センターに移ったのち、1960年58歳で、ハーバード大学の特別教授に就任する。フリードマンは、中年期以降のエリクソンが、「他の何にもまして書くことと出版することを重視した」<sup>(40)</sup>としている。その執筆への情熱が、アイデンティティ概念の製作者としてのエリクソンの地位を確固たるものにした。

エリクソンの思想構築と心理社会的相対性

このように、移住者として移り住んだアメリカで、精神分析の臨床家として心理療法の才能を発揮し、周囲に認められていくことになったエリクソンは、大学教授となり、「希望の徴を探し求める知識人として、戦後アメ

リカの政治や文化に関わった」<sup>(41)</sup>。エリクソンが臨床家から思想家へと幅を広げていくきっかけは、グレゴリー・ベイトソン、ルース・ベネディクトらの文化人類学者との出会いであった。「参加観察」の手法を吸収し<sup>(42)</sup>、心理的なものと社会的なもの、発達のなものと歴史的なものとの相互作用、言い換えれば自我と文化や歴史との関連性に対する関心を深めていったエリクソンは、1950年48歳のときに最初の著書である『幼児期(子ども期)と社会』を出版した。その初版のまえがきで、「本書は精神分析医としての臨床経験から生まれた」としつつも、「精神分析学は、個々の自我を鈍化させ、ゆがめる諸条件に関する集中的研究から、社会組織の中にある自我の基盤に関する研究へと重点を移行させつつある」という認識を表明、そのうえで「本書は自我が社会と結ぶ関係についての精神分析学の書である」<sup>(43)</sup>と宣言している。この著書では、エリクソンの理論のなかで最も有名な、8つの発達段階のほか、幼児の不安や自我の破滅、遊びの意義、アメリカ・インディアン族の無感動さ、帰還兵の精神的混乱、アメリカにおけるアイデンティティの問題、ヒトラーの児童期やゴリーキーの青年期の分析などが論じられている。その名のとおりに、幼児期と社会について、精神分析学、文化人類学、歴史学といった特定の分野の枠にとらわれずに、独自の理論を構築したものであり、大きな反響を得た。

その後1958年に『青年ルター』を出版、この著書の副題は「精神分析と歴史の研究(A Study in Psychoanalysis and History)」である。この研究について、エリクソンは、「精神分析を歴史研究の手段として用いることに

よって、歴史の一場面（本書では偉大な改革者の青年時代）を再評価しようとするもの<sup>(44)</sup>と位置づける。これは、ルターのアイデンティティの危機と自分の声と言葉を見出していく過程とを描き出した心理歴史研究（psychohistory）の業績である。のちに、エリクソンは、エヴァンズとの対話で「心理歴史研究の主な目的は、一定のリーダーの特殊なアイデンティティ欲求と、彼の歴史的時代の「典型的」アイデンティティの要求を関連づけようとする事だ」と述べている。エリクソンの代名詞ともなった心理歴史研究は、ヒトラーからルターを経て、ガンディーやジェファーソンへと至る一連の著作のなかで深化していった<sup>(45)</sup>。

発達心理という観点からのアイデンティティ研究の文脈では、1959年に出版された『アイデンティティとライフサイクル』に収録された「自我の発達と歴史的变化—臨床的な覚書」「健康なパーソナリティの成長と危機」「自我アイデンティティの問題」という3つの論文が重要である。これらは、若者に特有な心理的課題である自我アイデンティティの形成について描写したもの、つまり「人間のライフサイクルの発達のなロジックの中で社会心理的アイデンティティが占める位置」<sup>(46)</sup>について扱ったものとされる。1940年から50年にかけて構想された、エリクソンのアイデンティティ概念の土台が記述されているといってもよい。1968年の論文集『アイデンティティ—青年の危機』とともに、エリクソンのアイデンティティ概念の理解にとって極めて重要な業績である。

1964年には、講義・講演を修正加筆して作成した論文をまとめた『洞察と責任』が出

版された。これらは「各世代が次代に負っている責任の問題について臨床的洞察から光をあてて」<sup>(47)</sup>話してみたものだと述べられている。最後の章にあたる「黄金律の問題再考」は、エリクソンの倫理観、理想を示したものであり、エリクソンの政治観、倫理観をみていくうえで重要である。この著書の中で展開されているアイデンティティと倫理、アイデンティティと責任というテーマは、ガンディーに焦点をあてた心理歴史研究に引き継がれていく。60歳代のエリクソンは、マハトマ・ガンディーの歴史的な存在と、彼が〈真理（サティヤグラハ）〉と呼んだものの意味の探求に精力的に取り組み、1969年67歳のとき『ガンディーの真理』を出版した。これは、心理歴史研究の最高峰であると同時に、社会や次世代への責任についての深い洞察が示された魂の書であるといえる。その後70歳代で、『歴史の中のアイデンティティ—ジェファーソンと現代』（1974年）、『玩具と理性』（1977年）が出版された。続いてエリクソンの関心は「老年期」へと向けられ、『ライフサイクル、その完結』（1982年）、『老年期—生き生きとしたかわりあい』（1986年）として結実していった。

以上、エリクソンの理論展開をおってきたが、エリクソンは、常に、心理（個人）と社会、個人の人生（ライフヒストリー）と社会の歴史（ヒストリー）、個人のアイデンティティとその時代その社会の集合的アイデンティティとが相互に関連しあっていること、つまり、その心理社会的相対性＝関連性（psychosocial relativity）を丹念に物語ってきたといえるだろう。エリクソンはこう語る。

アイデンティティについて考察する際、個人の成長とコミュニティの変化とを切り離すことはできないし、また（『青年ルター』の中で例証したように）、個人の人生におけるアイデンティティの危機と、歴史発展におけるその時代の危機とを切り離すこともできない。なぜなら、両者は相まって互いに他を規定しあい、真に相互関連的だからである。実際、心理的なものと社会的なもの、発達のものと歴史的なものとの間のすべての相互作用は、……一種の心理社会的相対性＝関連性としてのみ概念化されうるのである<sup>(48)</sup>。

エリクソンの著書や論文は、独特の書き方ゆえに決して読みやすいものではない。それにもかかわらず、多くの人びとの、とりわけ若者の心を捉えたのは、この心理社会的相対性＝関連性からアイデンティティを語ることが時代の要請と符合していたからである。鎌幹一郎は、1960年代の異議申し立ての時代に、自分と社会のつながりがどうあるべきか真剣に悩み考えた若者たちを鼓舞し、生き方を問うた1冊が、エリクソンの『幼児期と社会』だったと指摘する。

若者は常に現在の存在を模索し、将来を展望し、自分の存在を吟味していく。「アイデンティティ」とは、まさに、このような歴史と時代の中で、揺れ動く自分の存在意識をさしているのである。このような歴史と社会状況との交点に存在する自己を表現する適切なことばがなかった。「アイデンティティ」というこ

とばが、この状況をとらえ、表現することばとして現われたとき、人びとはそのイメージの喚起力にとらえられたのであろう<sup>(49)</sup>。

アイデンティティの概念が、「個人的なことは政治的なこと」という68年革命のスローガンと共鳴していたことはすでに指摘したとおりである。エリクソンの生きざまとも重なって、また、移民の国であるアメリカ社会の特性や当時の政治状況、現代社会の変化の激しさを背景に、アイデンティティという概念は広く受け入れられていった<sup>(50)</sup>。エリクソンのアイデンティティ概念もまた時代や社会との相関の中で生まれたものである。

#### エリクソンの思想体系

アイデンティティ概念を含むエリクソンの思想体系全体へと目を向ければ、その学問的広がりや展開の自由さに驚かされる。『エリクソンの人間学』の著者である西平直は、エリクソンが、精神分析学の正統派やフロイトの立場を意識しつつ、自我心理学を対象関係論的に展開させ、社会や歴史との関連にまでつないでいった点を指摘し、精神分析学に引き付けすぎるとエリクソンの理論の醍醐味が見失われるという。また、エリクソンは発達理論を展開したのであるが、「発達という事実を〈世代継承〉に、〈歴史〉に、〈自己超越〉につないで」おり、「単なる発達論の枠組みには収まりきれない壮大な理論地平をもって」いる<sup>(51)</sup>。こうした壮大さを踏まえるとき、エリクソン理論の〈全体〉は、心理学や社会学や教育学などの学問分野を自由に横断しながら科学と思想をつないでゆく「一つのもの



の見方」とみるべきであり、「人間学」と呼ぶのがふさわしい。ここで西平がいう「人間学」とは、外側から「客観的なデータ」を収集することによって実証的な客観性を追求する作業と、内側から体験しつつある「自分の人生」を自己洞察する作業とを、いったん区別しつつ相互に関連づけ、両立させていかねばならないものである。エリクソンの「人間学」の魅力は、この二つの作業の織り成す絶妙なハーモニー、言い換えれば、「学問の言葉と生きた経験の実感とを何度も往復しながら一つの言葉へと練り上げる、そのたぐい稀なセンス」<sup>(52)</sup>にある。エリクソンの書くものは、彼が理論家や作家であると同時に、臨床家であることを常に想起させるものでもある。

心理と社会、心理と歴史の相対性＝関連性を自身の視点から縦横無尽に描き出すエリクソンの思想について、エリクソンの薫陶を受けた精神分析家でもあるロバート・コールズは、『E. H. エリクソンの研究』のなかで、「精神的分析的研究」、「歴史的研究」、「倫理的自省」という3つの要素を含むと指摘している<sup>(53)</sup>。この「倫理的自省」が、ほかの2つの研究に分かちがたく入り込んでいるところにエリクソンらしさがある。『青年ルター』や『ガンディーの真理』で展開した心理歴史研究もまた、西平が指摘するように、常に目の前の患者に寄り添う臨床家のごとく「目で見、心を感じ、肌で体感したことを言葉によってすくい取る」<sup>(54)</sup>巧みに裏打ちされており、それが独特の魅力を生み出している。ただ、その歴史的事実の扱い方には疑問が差し挟まれてもいて、20世紀の心理分析の経験を、他の時代に生きた人物、西洋文化とは異なる文化を

生きた人物に当てはめることに妥当性があるのか疑問視もされている<sup>(55)</sup>。批判があるものの、コールズが述べるように、エリクソンが「心理学や道徳的観点から自分自身について理解する方法をさし示し、精神分析と社会科学（人類学、社会学、歴史学）をつなげるために大いに貢献し、複雑に入りこんだ理念を洗練された達文で解き明かし、そしてルターやガンディーなど歴史上の人物の人生を忘れがたい新鮮さと独創性と技巧で探索し、そうすることで伝記的探求の本質を豊かなものとした」<sup>(56)</sup>人物だと評するのは適切といえるだろう。

#### エリクソンの手法

芸術家を志し臨床家として才能を発揮し著述家となったエリクソンは、その叙述の手法も独特である。エリクソンは、アイデンティティをはじめ個々の概念に明確で一貫した定義を与えて理論を構築する手法ではなく、臨床例や偉人の伝記等を用いて、その複雑な全容を浮かび上がらせるような、いわば「絵画的」手法を用いている。橋本広信は、エリクソンは「理論を語るより、「文脈」（具体的現象）を語ることによって概念を語る」<sup>(57)</sup>と表現している。そのため、エリクソンが提示する理論や概念は、単純な定義や一面的理解を許さない。生涯をかけて探求したアイデンティティ概念も、そのとき向き合う研究対象にとって最もふさわしい言葉を選んでそのつど表現され説明されるため、一貫性に欠ける点は否めず、その捉え難さは、多くの研究者を悩ませている。

エリクソン自身、「この主題 [= アイデンティティ] について書けば書くほど、この言

葉はあらゆるところに広がってゆき、計り知れない深みをもつものになってしまう。できることはただ、多様な文脈のなかでこの概念が不可欠であるということを立証してゆきながら、探究することなのである<sup>(58)</sup>と述べている。西平によると、エリクソンは「アイデンティティという言葉を変義してから使い出すのではなく、アクチュアルな生きた場面で使われているまます、いわば生け捕りにして、そのまま理論のなかに解き放つ」。そうした表現方法をとるのは、「その生きる場である文脈から切り離され、無時間的に固定された抽象的一義的定義のうちに押し込められてしまうならば、この言葉は、その生命力を失ってしまう<sup>(59)</sup>」からである。エリクソンの見つけた現実には常に曖昧さや複雑さを伴う。それゆえに、その現実ごとに描き出されるアイデンティティ概念もまた曖昧さと複雑さを備えるのは当然である。曖昧さと複雑さを捨象しない論述手法は、概念の豊かさを伝えるとともに、安易な理解を拒むことで、読者を深い考察へと誘う。

以下、本論では、こうしたエリクソンの手法に抗いながら、アイデンティティ概念を整理し明瞭に描くことを心掛けて論述していく。それは、不十分さや不適切さをぬぐうことのできない試みともいえるが、「アイデンティティの政治」を考えるうえで、アイデンティティ概念の意味を確定していくことは重要である。エリクソンが教えてくれているように、アイデンティティ概念は、心理的であると同時に社会的、歴史的である複雑な概念である。アイデンティティと政治との関連性を考えていくうえでも、その複雑さを切り捨ててしまわないように注意しつつ、明晰な議

論展開を目指していく。

## 注

- (1) Francis Fukuyama, *Identity: Contemporary Identity Politics and the Struggle for Recognition* (Profile Books, 2018) pp. 6-7. [山田文訳『アイデンティティ』(朝日新聞出版, 2019年) 24頁。]
- (2) *Ibid.*, p. 11. [同上書, 29頁。]
- (3) *Ibid.*, p. 179. [同上書, 238-239頁。]
- (4) 吉田徹『アフター・リベラル 怒りと政治の政治』(講談社, 2020年) 273頁。
- (5) 同上書, 300頁。
- (6) マイケル・ケニー, 藤原孝・山田竜作・松島雪江・青山円美・佐藤高尚訳『アイデンティティの政治学』(日本経済評論社, 2005年) 19頁。
- (7) 同上書, 78-79頁。この点ケニーは以下のようにも述べている。「近年、何人かのアメリカの自由主義理論家たちは、異なる理由から——健全な市民社会とは両立不可能と思われるために——アイデンティティの政治とデモクラシーの論理を対比しようとしている。しかしながら私は、こうした自由主義者たちはアイデンティティを生み出す社会的流動性の危険性や、その民主的な重要性を理解するための、適切な枠組みを提供してはいないことを論じてきた。自由主義政治理論が集団行動と共存の意味を理解する言葉に対する、より内省的で自己批判的なアプローチは未だなされてない。コミュニティ・集団・社会運動が行使し得る、差異を内包した「公共圏の効果」に対してより一層注目することもまた、必要に迫られている」。 (同上書, 281頁。)
- (8) 吉田徹『アフター・リベラル 怒りと政治の政治』254頁。
- (9) 浅野智彦『「若者」とは誰か—アイデンティティの30年【増補新版】』(河出書房新社, 2015年) 17頁。
- (10) Erik H. Erikson, *Identity: Youth and Crisis* (W·W·Norton & Company, 1968) p. 23. [岩瀬庸理訳『アイデンティティ：青年と危機』(金沢文庫, 1971年) 16頁, 中島由恵訳『アイデンティティ：青年と危機』(新曜社, 2017年) 13頁。]

- (11) *Ibid.*, p. 295. [岩瀬庸理訳, 417頁, 中島由恵訳, 379頁。]
- (12) 渡瀬裕哉『なぜ、成熟した民主主義は分断を生み出すのか アメリカから世界に拡散する格差と分断の構図』(すばる舎, 2019年) 33頁。
- (13) 同上書, 67頁。
- (14) 同上書, 48頁。
- (15) 同上書, 49-50頁。(改行省略)
- (16) 同上書, 144頁。
- (17) 同上書, 197頁。
- (18) 石川准『アイデンティティ・ゲーム 存在証明の社会学』(新評論, 1992年) 213頁。
- (19) 同上書, 15頁。
- (20) 同上書, 204-212頁。
- (21) 同上書, 212頁。
- (22) 同上書, 213-214頁。
- (23) 同上書, 215頁。
- (24) 同上書, 218-219頁。
- (25) 同上書, 229-230頁。
- (26) Francis Fukuyama, *Identity: Contemporary Identity Politics and the Struggle for Recognition*, pp. 6-9. [山田文訳, 24-27頁。]
- (27) フクヤマのいうテューモス (thymos) とは, ソクラテスとマデイマントスとの会話に出てくる, 理性的部分と欲望の部分と区別された, 魂の第3の部分のことをいい, 魂の中の承認を求める部分のことである。それは, 自分自身の気高さを誇る気持ちと, 気高さに応じた行動をとれないときに感じる怒りの気持ちが宿る場所であり, 〈気概の部分〉とも呼ばれる。*Ibid.*, pp. 15-23. [同上書, 36-45頁。]
- (28) *Ibid.*, p. 37. [同上書, 64頁。]
- (29) *Ibid.*, p. xiii. [同上書, 14頁。]
- (30) *Ibid.*, p. 10. [同上書, 28-29頁。]
- (31) *Ibid.*, pp. xiv-xv. [同上書, 15-16頁。]
- (32) エリクソンの理論については, すでに拙稿「忠誠のゆくえ—E.H.エリクソンの政治心理学」『法学論叢』(京都大学法学会) 第130巻3号(1991年) および第130巻第5号(1992年) のなかで論じており, 本章の内容はそこでの論述を踏まえたものになっている。ただ, すでに30年以上経過しており, その後の研究成果を加え内容を修正加筆している。
- (33) Lawrence J. Friedman, *Identity's Architect: A Biography of Erik H. Erikson* (Scribner, 1999), pp. 33-39. [やまだようこ・西平直監訳, 鈴木眞理子・三宅真季子訳『エリクソンの人生—アイデンティティの探求者(上)』(新曜社, 2003年) 9-15頁。]
- (34) *Ibid.*, p. 40. [同上書(上), 16頁。]
- (35) *Ibid.*, pp. 44-48. [同上書(上), 22-25頁。]
- (36) *Ibid.*, p. 57. [同上書(上), 36頁。]
- (37) *Ibid.*, p. 74. [同上書(上), 55頁。]
- (38) *Ibid.*, p. 104. [同上書(上), 92頁。]
- (39) *Ibid.*, pp. 243-252. [同上書(下), 245-257頁。]
- (40) *Ibid.*, pp. 23-24. [同上書(上), xi頁。] フリードマンは, 「執筆への情熱がなかったとしたら, エリクソンは今日, もちろん非常に成功した臨床家として名を馳せていたであろうが, アイデンティティ概念の製作者, ホロコースト後の絶望のさなかにおいて希望の声を発した人物として知られることは, なかったかもしれない」(*Ibid.*) と述べている。
- (41) *Ibid.*, p. 21. [同上書(上), vii頁。]
- (42) R.I.エヴァンズ『エリクソンは語る—アイデンティティの心理学』(新曜社, 1981年) 75頁。
- (43) Erik H. Erikson, *Childhood and Society* (W・W・Norton & Company, 35th Anniversary Edition, 1985 [1950]) pp. 16-17. [仁科弥生訳『幼児期と社会1』(みすず書房, 1977年) 3-4頁。]
- (44) Erik H. Erikson, *Young Man Luther: A Study in Psychoanalysis and History* (W・W・Norton & Company, 1958) pp. 16-17. [西平直訳『青年ルター1』(みすず書房, 2002年) 17頁。] 歴史研究の手段である精神分析学もまたそれ自身固有の歴史をもつものであり, この研究は精神分析の問い直しも含んでいると指摘している。
- (45) のち, エリクソンは, 心理歴史という言葉で理解されている研究すべてが自身由来というわけではないことを指摘して, 自身の方法が精神分析に立脚している意味を強調している。Erik H. Erikson, *Dimensions of a New Identity: The*

- 1973 *Jefferson lectures in the Humanities* (W・W・Norton & Company, 1974) pp. 12-13. [五十嵐武士訳『歴史のなかのアイデンティティ—ジェファーソンと現代』(みすず書房, 1979年) 11-13頁。]
- (46) Erik H. Erikson, *Identity and the Life Cycle* (W・W・Norton & Company, second edition 1980 [1959]) p. 13. [西平直・中島由恵訳『アイデンティティとライフサイクル』(誠信書房, 2011年) xvii頁。]
- (47) Erik H. Erikson, *Insight and Responsibility* (W・W・Norton & Company, 1964) p. 9. [鑑幹八郎訳『洞察と責任』(誠信書房, 1971年) v頁。]
- (48) Erik H. Erikson, *Identity: Youth and Crisis* (W・W・Norton & Company, 1968) p. 23. [岩瀬庸理訳『アイデンティティ：青年と危機』(金沢文庫, 1971年) 16頁。中島由恵訳『アイデンティティ：青年と危機』(新曜社, 2017年) 13頁。] この点は、河井亨「E. H. Eriksonのアイデンティティ理論と社会理論についての考察」でも強調されている。『京都大学大学院教育学研究科紀要』第59号(2013年) 643頁。
- (49) 鑑幹八郎『アイデンティティの心理学』(講談社現代新書, 1990年) 45-47頁。
- (50) この点については、小此木啓吾、「同一性の探求」『モラトリアム人間の時代』(中公文庫, 1981年) 89-104頁参照。
- (51) 西平直『エリクソンの人間学』(東京大学出版会, 1993年) 2頁。
- (52) 同上書, 4頁。
- (53) ロバート・コールズ, 鑑幹八郎訳『エリク・H・エリクソンの研究』(ペリかん社, 1980年) 11頁。
- (54) 西平直『エリクソンの人間学』5頁。
- (55) 1970年代に入ってエリクソンへの批判が高まっていった点については、Friedman, *Identity's Architect: A Biography of Erik H. Erikson*, pp. 420-423. [『エリクソンの人生—アイデンティティの探求者(下)』452-455頁。]
- (56) フリードマン『エリクソンの人生』におけるコールズの序文にある最初の文章から引用。(Ibid., p. 15 [同上書, i頁])。
- (57) 橋本広信「アイデンティティ(エリクソン理論)の本質を探る……その内容と方法論……」『日本教育心理学会総会発表論文集』39(1997年) 58頁。
- (58) Erik H. Erikson, *Identity: Youth and Crisis*, p. 9. [中島由恵訳, i頁。]
- (59) 西平直『エリクソンの人間学』58頁。西平は続いて以下のように指摘している。「このアイデンティティという言葉は、まずさしあたっては、現実の曖昧さを処理し説明するために使われたのではなく、むしろ、その曖昧さと付き合い続けるための手掛かりとして、いわば「発見的(heuristic)」な機能をもって使われたということ、言い換えれば、理論のなかではこの言葉が、「操作的(operational)」に働くのではなく、「喚起的(evocative)」に機能することを期待して使われ始めた、ということなのである。」(同上書, 59頁。)